
ウルトラウーマンイーグレット～ふたりのアテネ～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラウーマンイーグレット〜ふたりのアテネ〜

【Nコード】

N2743L

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

宇宙の彼方にある惑星イーグルのアテネ王女は父のイーグル王に勘当を言い渡された。そして、そのイーグル王の城を、惑星イーグルを二万年もの間守り続けてきた赤き巨人、ウルトラウーマンイーグレットが破壊し、宇宙へ飛び立った。一方、地球人の少女、天王州 アテネは自分と同じ容姿で同じ名前の傷付いた少女と出逢い、地球の平和の為に命を懸けて戦う事を決意する。

++プロローグ++ (前書き)

これは、ハヤテのごとく！に登場する美少女、天王州 アテネが主人公のウルトラマンが実在する世界での物語を淡々と描くものです。過度な期待はしないで下さい。あと、小説を読む時は部屋を明るくして画面に近付きすぎないように注意して閲覧して下さい。

++プロローグ++

宇宙の彼方に惑星イーグルはあった。

その星に聳える城の玉座の前に、姫のアテネは父であるイーグル王に呼び出された。

「何かご用でしょうか、お父様」

貴族に相応しい服を着た金髪縦ロールの端正な顔立ちの少女、アテネが玉座に腰掛けたイーグルに対してひざまずいた。

「お前を呼んだのは他でもない。お前に地球という星に行ってもらいたいのだ。お前ももう十六。そろそろ、宇宙に旅立っても良い年頃だ」

「しかし、地球には怪獣が居ると聞いています。そんな所へ大切な娘を行かせるなんて、危険な事なんじゃないですか？」

「だから行ってもらうのだ」

「はあ？」

「今日限りでお前とは勘当だ」

「……え？」

疑問符を浮かべるアテネ。

「つまみ出せ！」

部屋を守る警備兵がアテネを城外へ連れ出した。

「もう帰ってこなくていいですよ」

「なっ……、ここは私の城よ！ 貴方にそんな事を言う権利があつて!？」

「王の命令です」

「お父様は何を考えてらっしゃるの!？」

「イーグル様にとって、貴方の存在は邪魔なんですよ。だから、この城から追い出そうと言う訳です。分かったら、この星からとつと消えて下さい」

アテネは眉間に青筋を浮かべながら握り拳にグッと力を入れた。

「どうかなさいました？」

アテネは奇声を発して警備兵の腹を殴りつけた。

「ぐおわっ！」

警備兵は腹を押さえて体を振りながら蹠よこ跟こめく。

「親父への見せしめに貴様を殺してやる！」

アテネは警備兵を上空に蹴り上げた。

「イヤ　ッ！」

アテネは高く飛び上がり、警備兵の前で宙返りをする。そしてその勢いを利用して組んだ両手で真下へ叩き落とした。

「ぐあっ！」

地面へ墜落する警備兵。

アテネは警備兵の前に着地し、全身の骨が砕けて動けなくなった警備兵の頭を掴んで持ち上げ、反対の手を胸に突き刺して心臓を握り潰した。

警備兵は心臓破裂のショックにより即死した。

「うおりゃあ！」

アテネは警備兵の屍を城の王室に向かって投げ飛ばした。

屍は窓ガラスを突き破って部屋の中に転がった。

「何事だ！？」

驚いたイーグルは死体に駆け寄った。

「おい、どうした！？　しっかりしろ！」

イーグルは死体を揺さぶると同時に違和感を覚え、恐々と手の平を見た。そこには真っ赤な血液がべつとりと付着していた。

「誰がこんなことを！？」

イーグルは窓へ駆け寄って外を見た。そこには、全長五十二メートルの美顔の人ならざる者が立っていた。

その体は赤く、胸部には青く光るカラータイマーが付いている。

その名はウルトラウーマンイーグレット。

彼女は二万年前に惑星イーグルが侵略を企む異星人に襲われた際に颯爽と現れて敵を倒して以来、この惑星を守り続けてきた英雄ヒーローで

ある。

「貴様がやったんだな!？」

イーグレットは右手から光球を城へ放った。

城が爆発を起こし、イーグルは瓦礫の山に埋もれてしまった。

イーグレットは空を見ると、宇宙へ飛び立って彼方へ消え去った。

第1話：ふたりのアテネ（前書き）

危険を顧みずアトランタ星人の踏み潰し攻撃からもう一人のアテネを救ったアテネ。代わりに圧死した彼女はもう一人のアテネと合体して……。

第1話：ふたりのアテネ

練馬区の一角に建てられた古びた集合住宅、ムラサキノヤカタ。端正な顔立ちをした金髪縦ロールの少女、天王州てんのうす アテネはその一室で一人暮らしをしている。

携帯電話のアラームが鳴り、アテネは起床した。リビングから美味しそうな匂いが漂ってくる。

(また勝手に上がり込んだわね)

アテネは布団から出ると、服を着替えてリビングに向かった。テーブルの上には出来立ての朝食が用意されていた。

朝食を作ったのは、水色短髪で童顔の少年、綾崎あやさき ハヤテ。彼はアテネが理事長を勤める白皇学院に通う二年生で、隣の部屋に住んでいる。彼女はそれに、秘かに想いを寄せていた。

「朝食ぐらい自分で作れるわよ、全く」

アテネは文句を垂れながら席に着いてハヤテの手料理を口にする。「ハヤテの料理はいつ食べても美味しいわ」

朝食を食べ終えたアテネは、後片付けをしてトイレへ入り、用を足して洗面所に向かう。

(いつ見ても綺麗な私。ハヤテは私の事、どう思ってるのかしら)洗面台の鏡に映った自分の顔を見たアテネは、そんな事を考えながら洗顔と歯磨きをして寝室に戻った。そして、出掛ける支度をして登校をする。

学院へ着き、校舎に入って理事長室へ向かう。

「え？」

理事長室に傷だらけの少女が倒れていた。

「貴方、大丈夫？」

近寄って声をかけると、少女は起き上がった。

「「うわあ!？」」

二人は互いの顔を見て驚いた。

「何で私が二人居るの!?」

二人は互いに全く同じ動きをして安堵の溜め息を吐いた。

「何だ、鏡か。でも何でこんな所に鏡が?」

二人は互いに目の前の自分と同じ姿の人物を改めた。

「鏡じゃない!?」

「貴方、何者なんですの!？」

「それはこっちのセリフですわ!」

「私はイーグル星のアテネよ」

自分と同じ姿をした傷だらけの少女はそう答えた。

「私もアテネですわ」

「同じ名前?」

「そんな事より、何が遭ったの?」

「この星の近くで星人とやり合ったの。何とか追い返す事は出来たけど、倒せなかったから、またやってくるかも知れないわ」

「星人って巨大化するのよね? 貴方も出来るの?」

「ええ、ディファレーターを浴びてますから」

「と言うと、M78星雲から放たれてる放射線ですわね」

「詳しいのね」

「知り合いにL77星人が居るの。それでね」

「そうなんだ」

その時、理事長室にハヤテがやってきた。

「え?」

二人のアテネを見て戸惑うハヤテ。

「何でアーたんが二人居るの?」

惑星イーグルから来たアテネとハヤテの目が合い、お互いの瞳が同時に青白く光り輝いた。

「宇宙人!？」

「……!？」

正体を見抜かれた惑星イーグルのアテネは驚いて窓から外へ逃げ出した。

「何なの、あの子？」

「彼女は貴方と同族よ」

「え？ 変だな……。惑星イーグルにウルトラ一族は居ない筈……」

「じゃあ別の星から来たのでは？」

「あ、成る程」

ハヤテは窓に近寄る。

惑星イーグルのアテネが校庭の木の陰に隠れてこちらの様子を窺っている。

ハヤテは外へ出ると、イーグルのアテネに近付いた。

「来ないで！」

後退りするアテネ。

「私を宇宙人と知ってるという事は、私を襲った星人の仲間なんですよ！？」

「何を言ってるんだい？ 違うよ。僕は君の仲間だ」

「私には分かってるわよ。貴方がアトランタ星人だって事」

ハヤテの顔が険しくなる。

「正体を知られたからには生かしてはおけないな」

ハヤテはそう言っつて、全長五十メートルの人ならざる者へと変身した。

「踏み潰してやる」

アトランタ星人が足を持ち上げる。

頭上に迫る星人の足。

「危ない！」

アテネが走ってきてイーグル星人のアテネを突き飛ばした刹那、星人の足に踏み潰された。

「おっと、間違えたか」

星人が足を退かすと、圧死したアテネが横たわっていた。

「アテネ！」

イーグル星人のアテネがアテネに駆け寄る。

「私の為に若い命を捨てるなんて……」

こぼれ落ちる涙。

「助けてくれたお礼に私の命を差し上げますわ」

イーグル星人のアテネは光球となってアテネの中に入った。

「う……、うん……？」

目を開けて起き上がるアテネ。

「よくも踏み潰してくれましたわね！」

「死に損ないが！ 再び圧殺してやる！」

アテネは立ち上がると、右手を挙げた。

全身が光り輝き、ウルトラマンイーグレットに変身するアテネ。

「ハヤテをどこに隠した!？」

「あのL77星人の事か。それならロープで縛ってトイレの掃除用具入れに閉じ込めてあるわ」

「そうか。ならば貴様は死刑だ！」

イーグレットはそう言つて先制攻撃を仕掛けた。

ひらりとかわす星人。

イーグレットは星人にバックキックを浴びせて倒し、マウントポジションで顔面を殴りまくる。

星人はイーグレットの拳を受け止めて押し返し立ち上がった。

「おらっ！」

星人の膝蹴りがイーグレットの腹に決まり、イーグレットは腹を押さえて体を振りながら蹠踉めく。

「はっ！」

星人はイーグレットを蹴り倒し、マウントで首を締め上げた。

「貴様も親父の居る地獄へ送つてやる」

「……!？」

「お前に勘当を言い渡したのは俺なんだよ」

イーグレットは星人の手首を持ち上げ、蹴り飛ばして立ち上がった。

背中から落下する星人。

「仲間のバルタン星人が平民に乗り移ってお前を襲ったが、返り討ちに遭って気付いたそうさ。お前が、アテネがイーグレットなのだと」

星人は起き上がると同時にジャンプ。宙返りをしてイーグレットの背後に回り込もうとしたが、着地の瞬間にイーグレットの回し蹴りを食らって吹っ飛んだ。

「いつからお父様と入れ代わってたんだ!？」

「初代イーグル王の時からだ。あの星は既に侵略済みなのだ」

イーグレットは高く飛び上がって宙返りをする、レオキックを盗んで編み出したイーグレットキックを繰り出した。

星人は立ち上がり様に避けようとしたが、間に合わずに必殺技を受けて爆裂霧散した。

イーグレットはアテネの姿に戻ると、校舎へと駆けていった。

男子トイレの掃除用具入れに、ハヤテは全身をロープで縛られ、閉じ込められていた。

扉は外から鍵がかかけられてる為、開けることが出来ない。

(くそっ、どうしたらいいんだ!?)

その時、扉の向こう側にアテネがやってきた。

「ハヤテ、そこに居るんですの?」

「その声はアーたん! お願い、ここを開けて!」

アテネは鍵を開け、扉を手前に引いた。

中からロープで縛られたハヤテが出て来る。

「貴方、油断したわね」

「星人がアーたん^{ほと}に化けてたんだよ」

アテネはロープを解いた。

「私もハヤテの偽物に遭いましたわ。でも、彼女が倒してくれました」

「彼女?」

「イーグル星から来たウルトラウーマンイーグルットの事よ」

「え、イーグルットが来てるの!? どこ!?」

「ここに」

「え?」

「ハヤテって本当に鈍いわね。貴方の前に居るでしょ?」

「アーたんは地球人でしょ?」

「合体したのよ!」

「それ本当?」

「私が貴方に嘘を吐いた事があつて?」

ハヤテの心が懐かしいL77星へ飛んだ。

二万年ほど前、まだ小さかったL77星の王子であるハヤテは、街で出逢った平民のアテネと恋に落ち、結婚の約束をしていた。だが、程なくしてアテネは母親の都合で星を出て行ってしまったのだ。

「本当にあの時の?」

「昔の事だから私もあまり覚えてないのだけれど、L77星で生まれたのは間違い無いわ」

「アーたん!」

ハヤテはアテネを抱き締めた。

「ちよつと、いきなり何ですの!?」

「僕が卒業したら結婚して!」

「ハヤテ!?」

「僕、アーたんの事が好きなんだ!」

「え?」

「この学院で君と初めて逢った時、L77星で離れ離れになった彼女とそっくりだなんて思って、君を好きになつたんだ。君は僕の想い、受け取ってくれるかな?」

「もちろんですわ。私もハヤテの事が好きなんですの」

「アーたん」

「ハヤテ」

二人はお互いに見詰め合い、口付けを交わそうとした。

その時、年下の少年が入ってきた。

「こんな所に居たのか、ハヤテ」

後少しという所で、ハヤテは振り返った。

「ワタルくん!？」

橘たちばなワタル。新宿でレンタルビデオ店を開いてるクラスメイト。

決してダディアナザンではない。

「……って、何してるんだ？」

ハヤテとアテネは互いに距離を取った。

「別に何もしてませんよ」

「いや、理事長と抱き合ってたじゃねえか。今、はつきりと見たぞ。しかも、ここ男子トイレだぞ」

「誰にも言わないで下さいよ」

「言われて困るなら黙ってるけど。それより、桂がお前を捜してたぞ。天球の間に居るから直ぐに行ってやれ」

ハヤテはアテネに向き直る。

「ごめんね、アーたん」

「ふん」

アテネはそっぽを向いた。

「貴方なんて大っ嫌い」

「ごめん、アーたん」

「謝って欲しくなんかありませんわ! さっさと消え失せなさい、この浮気者が!」

「……………」

ハヤテは寂しそうな面持ちで天球の間へ向かった。

「遅いわよ、ハヤテくん」

金色の髪留めを付けた桃色長髪の少女が読んでいた新聞から顔を上げて言った。

彼女は桂 ヒナギク。ハヤテのクラスメイトで容姿端麗な完全無欠の生徒会長。剣道部の主将を勤めてる。一年の時に編入してきたハヤテの事が好き。幼い頃に実の両親が借金を残して失踪している。

家族構成は義父、義母、実姉の雪路。

「すみません。それで、僕に何の用ですか？」

「貴方、私と付き合いわない？」

「すみません。気持ちはいれ……って、うわあっ!？」

ハヤテの頬をマグカップが掠めた。

「何するんですか!？」

「当然、お付き合いしてくれるわよね？」

「嫌ですよ！ 第一、僕には好きな人が！」

ヒナギクは笑みを浮かべながら額に青筋を立てた。

「付き合いなきやダメですか？」

「貴方には私と付き合いなくてはいけないと言う法律があるの」

「何ですか、それ？ そんな法律は無いですよ」

「宇宙人である貴方は知らないかも知れないけど、ハヤテと言う名の男は私と付き合いなきやいけないのよ」

「要するにヒナギクさんは僕と付き合いたい、と。じゃあ僕の心をアーたんからヒナギクさんに向けられたら考えますよ。それじゃ」

ハヤテは部屋を出て行った。

(絶対に落としてやるわ!)

ヒナギクはそう心に誓うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2743/>

ウルトラウーマンイーグレット～ふたりのアテネ～

2010年10月9日21時06分発行